

漁海況予報事業浅海定線調査

—陸奥湾—

(要約)

仲村 俊毅・天野 勝三・金田一拓志・橋本 勲
尾坂 康・永峰 文洋・浜田 勝雄・尾鷲 政幸

この調査は、陸奥湾内における海況の特徴や永年変化などを把握して、湾内の漁業および増養殖業の健全な発展に資するため、海況予報に関する基礎資料を得ることを目的として実施したものである。詳細については脚註の資料に報告済みであるので、これを参照されたい。

調査方法

調査地点……6 定点、毎月1回(1・3月を除く)、年10回観測

調査水深……0・5・10・20・30・40・50mおよび底層

調査項目……水温、塩分、COD(2地点)、クロロフィルa(2地点)、水色、透明度、卵・稚魚・動物プランクトン(2地点)、植物プランクトン(2地点)、気象

調査結果

- (1) 年間の最高水温は9月に現われ、st. 4, 0mで23.7℃、30m以浅では全地点で22℃を越えている。一方最低水温は2月下旬のst. 5で2.16℃となっていた。
- (2) 塩分量については夏季以降の低塩分が特徴的であった。これは例年夏季以降に多くなる津軽暖流水流入量が、本年度は少なかったためではないかと考えられる。
- (3) CODは6、7月に低く、9～11月に高い傾向を示したが、2ppmを越えていない。
- (4) クロロフィルa量は0.02～0.93mg/m³の範囲にあり12～2月に高い傾向があった。
- (5) 水色は3～5の範囲にあったが、陸水流入の影響で10月のst. 1では6となっていた。
- (6) 透明度は10～28mの範囲にあり、平均ではおよそ13～15m程度であった。
- (7) 卵・稚魚は6月から9月にかけて種類数、個体数ともに多くなる。種類では卵・稚魚ともにカタクテイワシが最も多い。
- (8) 動物プランクトンは冬季・春季には冷水種の*Centropages abdominalis*が、夏季・秋期には暖水種の*Pyrocystis noctiluca*, *Labidocera japonica*, *Penilia schmackeria*が優占種となっていた。
- (9) 植物プランクトン沈澱量は秋期、冬季に大きくなり、クロロフィルaの変動と良い対応をみせている。出現種は春季は*Nitzschia seriata*, 夏季は*Noctiluca schintillans*, 秋季には*Chaetoceros affinis*, 冬季は*Chaetoceros socialis*が主要なものであった。



詳細については「昭和54年度漁海況予報事業浅海定線調査結果報告書」 青水増資料S. 54—No. 6
昭和55年3月、を参照されたい。